

ロバート・バートン  
『憂鬱の解剖』  
第1部 第2章 第4節 第1-6項

岡 村 眞紀子  
川 島 伸 博 記

4節1項

非必然的な外的遠因、偶発的で非本質的原因、その一つ目として乳母。

外的で周辺の遠因のうち必然的なものについては前節で十分に述べたので、ここからは非必然的なものについて論じていく。これらについてフックスは、数が多く、不確かで、不慮なるものなので、手の施しようがない、と言うが、フェルネルによると、「これらは防ぐことができ、必ずしも頻発するものではない」からこそ「必然的でない」とされる。これから取り扱う非本質因の多くは、予期できず、偶然生じるとは言え、防ぐことができず、致命的という点で、フックスの言う前者に分類した方がいいかもしれない。しかし、中には付随的で、必ず病気につながるものもあり、それらについては憂鬱症の原因リストに含んでしかるべきである。ただし、これらをすべて列挙するのは不可能なので、特筆すべきもの、すなわち憂鬱症を惹き起こす付随因に議論を限定し、順を追って、簡潔に述べていくことにする。

この種の悪しき巡り合わせで、生まれてから最初に子供が出会ってしまう可能性があるのは、ひどい乳母であり、これだけでも、子供は揺籠にいながらにしてこの病気に染まってしまうことがある。アウルス・ゲッリウス(12. 1.)は雄弁な哲学者ファウオリヌスを引用し、このことを十分に証明する。「種だけでなく、母乳からも、美德と性質とが継承されるという事実は、人間だけでなく、ほかの生物をみても明らかである。ファウオリヌスは子山羊と子羊の例を挙げて説明している。もしどちらか一方が他方の母乳、すなわち子羊が山羊の、子山羊が羊の母乳を飲んだりすると、羊の毛は硬くなり、山羊の毛は柔らかくなってしまう」。ジェラルド・ドゥ・バリは『ウェールズ旅行記』(1. 2.)で、彼の時代にあった特筆すべき例を根拠に、この事実が正しいことを裏付ける。何かの間違いで、雌豚が猟犬の乳を飲んで育ったことがあるのだという。するとその豚は「不思議なことに、鹿の類を狩猟するようになり、しかもその狩りの技は巧みで、そらの猟犬を凌ぐほどであった」。これを受けジェラルドは、「人間と獣は、育成期に授乳してくれる者の性質と気質を帯びる」と結論付けている。ファウオリヌスはさらに論を進め、乳母が

「不細工、不貞、不誠実、生意気、大酒飲み」、残忍だったりすると、その母乳を飲んで育つ子の性質もそうになってしまう、と明言している。この他にもあらゆる性向、それから梅毒や癲病や憂鬱症といった病気が、乳母の母乳を通して、いわば接ぎ木され、子供の気質に刻印されてしまうのである。カトーはおそらく、この事実を知っていたのであろう。彼は召使の子供たちに、自分の妻たちの母乳を与えて育てていたという。こうして育った子供たちは、カトーとその家族をさらに深く愛したというし、その気質も十中八九、カトーの家族と同じであった。母乳によって精神的気質が変化することの証明としては、以下の二つの例を挙げるにしくはないだろう。まずはディオンの例。カリギュラの残忍さは、父親にも母親にも帰することはできず、その原因はただ残忍な乳母にあったという。その乳母は、カリギュラが乳を飲む際、いつも乳首に血を塗り付けていたのだ。カリギュラがあればどの殺戮を犯したのは、このためであろう。乳母の残忍さがカリギュラの髪の毛一本一本にまで行きわたっていたのだ。もう一つは皇帝ティベリウスの例。彼は大量飲酒として世に広く知られているが、この原因も乳母が吞兵衛だったからである。尊者ビード曰く「乳母が白痴なら、その母乳で育つ子もそうなり」、たとえそうならなくとも悪影響は受ける。フランチェスコ・バルバロも『妻の務め』2巻最終章でそのことを完全に証明している。またアントニオ・デ・グェバラも『マルクス・アウレリウス伝』2巻で、子供が乳母の性質を帯びるのは間違いない、と論じる。肉体的疾患が母乳によって継承されることについては、疑いの余地がない。ランプリディウスが伝えるように、皇帝ウェスパシアヌスの息子ティトゥスが病弱であったのは、その乳母がそうであったからである。また医者たちの言うことを信じるならば、身持ちの悪い乳母から子供が梅毒に感染することが多いとのことだ（ボタッロ『梅毒治療法』61章）。乳母によっては、世話の仕方がひどかったり、子供をほったらかしにしたり、不快で腹の立つことがたくさんあるのだが、そんなことよりも大きな危険が、母乳を通して子供にもたらされるのである。こういったことを嫌い、アリストテレス（『政治学』7. 17.）とファウオリヌスとマルクス・アウレリウスは、どんな状態であれ、子供は母親が育てるべきだと主張し、乳母に預けることを許さなかった。というのも、健全で子育て可能な母親が自分の子を乳母に預けるのは、グアッツォ曰く、「自然にもとる行為」であり、子は母が自分で育てるのが当然である。母親は、乳母のように卑しく雇われの身の女よりも、注意深く、愛情深く、子供に寄り添うものであり、このことは、世界中で認められる事実である。ロドリゴ・デ・カストロは『婦人医学大全』（4. 12.）で「もっとも適切なのは、母親が自分の子供に乳を与えることである」と言葉を尽くして明言しているし、このことを否定する者などどこにもいないだろう。ただ、女性の中には、この原則を厳密に守りすぎる人がいるのも確かだ。とりわけ有名なのは、スペイン生まれのあのフランス女王である。この件に関する彼女の態度は狂信的なまでの厳密さで、あるとき、彼女が目を見失ったときに、見知らぬ乳母が自分の子供に授乳したことを知ると、ひどく狼狽し、その子に乳母の乳を吐き出させてようやく落ち着いたのだという。しかし、彼女の場合、行きすぎだと言うべきだろう。そして、彼女のように度を超してしまう場合——こういうことは多々あるのだが——、母親は授乳をするのに適しておらず、子供から引き離さなければならない。こういった

母親には、プルタルコス「子供の育て方」、ヒエロニムスのラエタ宛書簡（2. 27.）「娘の養育」、マイノ・デ・マイノリ『健康指南』（2. 7.）、先述のロドリゴが忠告するように、健全で、気質がよく、誠実で、身体疾患のない乳母を選んでほしい。そして可能であるならば、悲哀、恐怖、悲痛、愚劣、憂鬱といった情念や精神の乱れのない乳母を選ぶべきだ。というのも、こういった情念は母乳を腐敗させ、子供の気質を変えてしまう。授乳期の子供は「湿った柔らかい土くれ」みたいなものであり、容易に体液が影響を受け、悪化してしまうのである。もしこういった乳母が見つかり、しかもその乳母が勤勉で世話好きであるようならば——ファウオリヌスやマルクス・アウレリウスには、好き勝手に反論させておこう——、私は母親よりもむしろ乳母を受け入れるだろう。この見解については、医者ボナッチオリと政治家のニクラス・ビーゼ（『共和国論』4. 8.）が「母親よりもずっと好ましい乳母もいるのだ」と同様のことを言っている。母親も乳母と同様、すぐさま邪になることもあるし、わがままで酒飲みの浮気女になることもある。短気で怒りっぽいあばずれになったり、狂ったり、馬鹿——母親の多くは実際そうだ——になったり、不健全になったりするのではないか。それに、母親よりも乳母の方が選択肢の幅は広がるわけで、それゆえ、母親がすぐれて高潔で、落ち着いていて、身体のだの部分も優れていて、健全な体液の持ち主でない限り、私なら子供はみな、母親ではなく、しっかりと他人に育ててもらおうだろう。そして、これこそが唯一の方法なのである。考えてみてほしい。結婚により人は他の家系に接木され血統に変化をもたらす。それゆえ、もし母親になんらかの欠陥がある場合は、ルイス・メルカドが『遺伝疾患論』で論じるように、乳母を利用することで、病気や成長するにつれて発症するかもしれない病を予防し、子供が両親から受け継いだ性悪な気質を矯正し、抑制することとなる。乳母の選択を上手く行うならば、これは、優れた治療法なのである。

## 4 節 2 項

### 憂鬱症の原因としての教育。

憂鬱症を惹き起こす非本質因の中で、二番目に論じてしかるべきは、教育である。というのも、ひどい乳母を避けたとしても、人は悪質な教育によって損なわれてしまう可能性があるからである。ヤーソン・ヴァン・デ・ヴェルデは教育のこの側面を憂鬱症の主要因にあげる。子どもに対して厳格で、きつすぎたり、あるいは逆にいい加減で、甘やかしすぎたりして、親や継母、家庭教師や指導者や教師が悪質な場合、この病気の泉となり、それを助長することとなる。両親や、子どものお守りと教育をする者が、厳しくしすぎて教育を誤ってしまうことはよくある。いつも脅したり、叱りつけたり、どなったり、鞭打ったり、叩いたりばかりしていると、可哀想に子どもたちはすっかり自信をなくして、怖気づいてしまい、その後もずっと元気になることなく、人生で楽しい時間を過ごすこともできず、何事にも悦びを見出せなくなってしまう。子どもを上手く育てるか失敗するかに関する極めて重要な事柄についても、とるべき道は、中庸という偉大な

道なのである。子どもが泣いたり、手に負えなくなると、乞食やお化けや鬼を持ち出してきて脅かす親がいるが、こういったやり方は多くの場合、誤りであるとラーヴァータは『亡霊論』(1.5)で述べる。というのも「恐怖から、子どもたちは深刻な病気に罹ったり、夜中、寝ている最中に泣き叫んだり」、これが原因で、一生、さらにひどい状況に陥っていくからである。こういった脅かし方はまったくくしないにこしたことはなく、あるいは、するにしても正しいタイミングで最小限に抑えるべきである。いらいらしがちで暴君的な阿呆教師、いわゆる「乾燥した教師」——ティンティリアヌス曰く「鞭振り回すアイアースたち」——は、この点で、絞首刑執行人や斬首刑執行人と同じくらい悪質である。寄宿学校の子どもたちに、ひどい食事を与えて絶えず苦しみ、自宅で食事を取る子どもたちには、厳しく接したり、冷遇したりすることで苦しめる。こうして彼らは子どもたちの心の調和、そして身体の調和を完全に乱してしまうのである。いつも叱られ、罵られ、しかめっ面をされ、鞭打たれ、課題を出され、居残りをさせられて、子どもたちは「心折れ」、何度もふさぎ込み、人生に倦み、「あまりの厳しさに、衰弱して、絶望し」、グラマー・スクールの生徒ほど惨めな奴隷はいないのではないかと思う(私自身そう思っていた)。エラスムスが言うように「少年たちの心は教師の不適切な言動に乱され」、子どもたちは教師の声に慄き、その表情に怯え、教師が来るだけで震える始末。アウグスティヌスも『告白』1巻などで、この種の教育を「恐怖による強制」、また別の箇所では殉教に匹敵する苦難と呼び、自分自身ギリシア語を教わる際ひどく心を傷つけられたと述懐する。「私は単語を一つも知らなかったのに、覚え込むよう、ひどい仕打ちや罰で厳しく強要された」。ベーズもまたパリの厳格な教師について同様の不満を述べている。その教師はいつも雷声で脅してきたので、ベーズは絶望して川に身投げしようと思った。その途中、叔父に出会って、その叔父が彼を引き取り、しばらくの間、彼をこの惨めな状態から守ってくれたから助かったのだが、そうでなかったら自殺していただろう。トリンカヴェッラ『診察』(1.16.)は「トレヴィーゾで過度な勉強と教師の脅しのため」ひどい憂鬱症になった19歳の患者を診た。指導者の多くは冷徹で厳しく、その厳しさゆえに弟子たちの気力を削ぎ、また、ひどい言葉で罵り、こき使って、虐待するので、弟子たちは絶望してしまい、決して回復することはない。

これと対極にある人たちもまた、逆にいい加減すぎることによって多大な害悪となる。この手の教育者は子供たちの養育を放棄し、子供たちが後々従事し生きていくための天職を示すことなく、手に職がつけられるような教育も行わず、つまり、いかなる意味においても、子供たちを優れた進路へと導くことはない。そのため、彼らの指導下にある弟子や学童や学生は、酒、怠惰、賭博などといったさまざまな不道德の路に足元をすくわれて流されてしまうが、最後には嘆くこととなり、両親を呪い、自傷する。甘やかしすぎ、すなわち「親バカの甘やかしと間違った寛容」も同様な結果をもたらす。たとえば、テレンティウスのミキオのように、やりたいことを何でも許し、小遣いを与えすぎ、子供たちの気質を煽る親がそうだ。子供たちが酒盛りしようと、売春宿に通おうとお構いなし。子供たちが喧嘩しようと、威張り散らそうと、放任して何でも好き勝手

にやらせる親。さらに音楽家の大音響の演奏を聞かせ、それを子供たちへの罰だというような親。

あの子は宴を開き、酒を飲み、香水をつけとるが、全部わしの金じゃ。

あいつは恋をしとるのか？ だったら好きなだけ金をだしてやろう。

家の戸を壊しよったと？ 修繕費はわしがだそう。なににな、

服をやぶきよったとな？ ならわしが直してやろう。——好きなことすればええ、

もらって、使って、散財しとりゃ。わしは許すことに決めとるんじゃ。

しかし、ミキオに対してデメオが言うように、「君はあの子を駄目にしている」のであり、「僕にはすでに目に浮かぶようだ。あの子が金欠に陥り、兵役につくためどこか別の土地に逃げる、その日の来ることがね」。このように親はしばしば間違いを犯すのだが、特に愚かな母親は多く、子供たちを溺愛するあまり、イソップ寓話の猿のように、最後には子供たちを押しつぶして殺してしまうのである。すなわち、彼女たちは子供たちの「身体の乳母、魂の継母」であり、子供の身体を膨らませすぎて、その魂を台無しにしてしまう。親バカたちは自分の子供が間違いをただされたり、管理されたりすることを許さず、むしろ子供たちが何をするにしても、つねに宥めかすので、その挙げ句、「子供たちは親に悲しみと恥辱と負担をもたらし、奔放で、頑固で、わがままで、言うことを聞かなくなり」（集会の書 30: 8, 9）、無骨で無教養、強情で、手に負えない野卑な人間になってしまう。カルダーノ曰く、「親バカたちの子供を愛するさまはあまりに愚かで、むしろ嫌っているようにさえ思える。というのも彼らは美德ではなく非行、学識ではなく放蕩、まっとうな生活と付き合いではなくあらゆる快楽と淫らな行動へと子供たちを育てあげているのだから」。またクインティリアヌスの以下の言葉の正しさは、誰にでも経験からわかるはずだ。「教育は第二の本性なのであり、人の心と意思とを変化させる。だからこそ、私は神に願う。我々自身、甘やかしすぎたり、厳しくしすぎたりして、子供たちの行儀を台無しにしてしまうことのないよう、子供たちの身体と心を軟弱なものにしてしまうことのないように、と。教育により習慣が形成され、習慣は性質を形成するのだから云々」。こういった理由から、プルタルコス「子供の教育」、ヒエロニムスはラエタ宛書簡（2. 27.）「娘の養育」で、すべての親に対し、とりわけ厳しい訓告を行い、教育は極めて重大な問題なのだから、子供たちを無分別で感情的で狂った家庭教師や、軽薄で間拔けで金銭ずくの人に託したりしないよう、あるいは、子供たちがきちんと養育・教育されるよう学費の出し惜しみをしないよう、子供を育てる際の注意について事細かく説明している。この訓告に従わない親について、プルタルコスは、「自分の足よりも靴のことを気にする」連中、自分の子供よりも富の方を大事にする本末転倒の輩と評している。またカルダーノによると、「自分の息子を金銭ずくの教師に託したり、断食の厳しい僧院に入れたりする親は、つまるところ、その子を学問だけの馬鹿、あるいは頭はいいが病弱な人間にしているのと同じなのである」。



#### 4節3項

#### 憂鬱症の原因としての恐怖と驚愕。

キケロは『トゥクルム荘対談集』4巻で、恐ろしい物事を見たり聞いたりした不安から生じる恐怖を他の恐怖から区別しているが、その点は、パトリッツィ（『君主と君主制論』5. 4.）も同様である。この種の恐怖はあらゆる恐怖の中でもっとも危険で激しく、身体全体液を急激に変容させ、魂と霊氣とを揺さぶり、強烈な印象を刻む。よって、この種の恐怖にとりつかれた人は決して回復することなく、他のいかなる内的要因と比べても、もっとも激しく耐え難い憂鬱症を惹き起こす、とフェリックス・プラタ（3章「心の疎外」）は自らの経験から語る。この種の恐怖は「霊氣と脳と体液に激しく刻印されるので、血液をすべて体外に放出したとしても、取り除くことはほぼ不可能であろう」。自分のもとに幾度となく運ばれて来た患者を診て、プラタはこれを「憂鬱症の恐怖種」と呼び、「この病に悩まされ、恐怖に怯える者は、性別・年齢に関係なく、老若男女あらゆる人たちである」と続ける。エルコレ・サッソーニアはこの種の（「**霊氣の乱れによる**」）憂鬱症に奇妙な名称を与え、これは体液の不調から生じるのではなく、霊氣の乱れ、攪乱、収縮、拡張に起因するものであり、激しく身体に影響すると主張する。この恐怖は大抵の場合、プルタルコス曰く、「恐怖の対象が間近にあるなど、差し迫った危険から」生じるのである。その恐怖の対象は、耳に聞こえる場合もあれば、目に見える場合もあるが、単なる想像かもしれない。「実際に現れることもあれば、夢の中の出来事なのかもしれない」。いずれにしても、多くの場合、その登場が突然であればあるほど、恐怖はより激しいものとなる。

恐怖が魂を襲うと、心臓は驚き飛出し、  
肝臓は恐れ慄き、波打つ血管の中で喘ぐ。

文法教師のアルテメドルスは、不意にワニの姿を目にして正気を失ったという（デュ・ローラン、7章「憂鬱症論」）。シャルル9世治下1572年のリヨン大虐殺は、凄まじく恐ろしかったので、多くの人々が狂気に陥り、そのために死んだ人もいた。そのとき妊娠中だった女性たちは予定日が来る前に子供を産んだ。概して誰もが恐怖で恐れ慄いたという。ラーヴァータ（1. 9.）曰く、幽霊や悪魔などを突如目にしたばかりに正気を失う人は多く、これはあらゆる時代に共通する出来事である。パウサニウスに記されている、復讐の女神たちを目にして狂ったオレステスもその例であり、その女神たちは黒服を着てオレステスの前に現れたという。ギリシア人たちは、この手の霊を「**お化け**」と呼び、それを見るとあまりに魂消てしまい——ひょっとすると冗談で悪魔のふりをしたものに驚いているだけかもしれないが——、

——真つ暗闇の中で子供たちは震え、  
誰もが何も見えず慄く——

こういった人たちはその恐怖が原因で一生を棒に振ってしまう。突然の火事、地震、洪水などの恐ろしい災害によってこの病気になる者もいる。医者テミソンは同じ病気に罹った患者を診ることで水恐怖症になったという（ディオスコリデス 6. 33.）。また怪物や死体を見て、その後何か月も情緒不安定になる人もいて、死体があったという部屋に入ることができなくなったり、一人きりで死体と一緒にあったりはとてもできず、たとえ何年たつていようと誰かが臨終を迎えたベッドにはどんなことがあっても入ろうとしなくなる。以下はバーゼルで起こった話である。季節は春、幼い子供たちが大勢で町のはずれの牧草地に花を摘みにでかけたのだという。するとそこには、絞首台があり、ひとりの罪人が刑を受け、つるされたままになっていた。子供たちはみなその光景にくぎ付けになっていたのだが、ある子が投げた石がたまたま当たってしまい、その死体がぶらりと揺れたものだから、子供たちは怖くなって一斉に逃げ出した。しかし、みんなよりも足の遅い女の子が、振り返ってしまった。すると揺れる死体が自分に向かって動いてくるように見えたのだろう、女の子は「追いかけてくる」と叫び声をあげたのだという。その子がそのとき感じた恐怖は凄まじく、その後、何日も心休まることなく、食事も睡眠もとることができず、結局、落ち着くことなく憂鬱症になり死んでしまった。バーゼルではまた別の女の子が、ライン川越しに、墓が開いて死体が出てくるのを見て、心が錯乱してしまい、どんなに慰めても心休まることなく、その後すぐ死んでしまい、その墓の横に埋葬されたという（プラタ『症例』1巻）。さらにこの町では、以下の話も記録されている。丸々と太った豚の腹が切り裂かれ、内臓が丸見えになっているのがある良家の女性の目に入った。ひどい悪臭が鼻をつき、彼女は耐えられずその場から立ち去ったのだが、そのとき、その場にいた医者が彼女に、あの豚と同じように貴女のお腹の中にも汚らしい排泄物がいっぱい詰まっているなどと言って、おぞましい例をいくつも持ち出して話を大きくしたものだから、その光景がこの良家の女性に深く刻まれてしまい、彼女は嘔吐を繰り返し、心身ともにはげしく乱れてしまった。その後何か月にもわたって、その医者は治療を施し、慰めたのだが、彼女を元の健康状態に戻すことはできなかった。彼女はその光景を忘れることができず、つねにその光景が目に残ったのだという（同上）。傷口が開いているのを見るのが耐えられず、気分を悪くしてしまう人も多い。処刑された人、憑依や卒中のような恐ろしい病気に罹った人、魔法をかけられた人を見た場合も同様。あるいは、本を読んでいて恐ろしい物事や、恐ろしい病気の症状、あるいは嫌いなことについてたまたま出会ってしまうと、心乱され、驚愕し、自分に当てはめてしまうので、まるでそれを実際に目にしたかのように情緒不安定になり、同じように病気に罹ってしまう人もいる。「彼らは死を夢見ているようだ」。彼らは夢を見、それについて常に考える。こういった恐ろしい対象を耳にしたり、読んだり、見たりすると、嘆かわしい影響が惹き起こされる。「心身に最大の乱れを生じるのは聴覚であり、ほかの感覚はこれほどの変化を生じない」とプルタルコスは主張する。「突然の話」や予期せぬ知らせは、内容の良し悪しに関係なく、心を乱し、睡眠と食欲を奪い、哲学者プロドロモス曰く「魂を圧倒し、その座から引きずり降ろす」。阿鼻叫喚や叫び声や恐ろしい物音——多くの場合、これらは

真夜中に突然、敵の来襲や予期せぬ火事などによって発せられるのだが——を耳にした人々を見ればわかるように、こういう風に慌てふためいて恐怖に陥ると、人はしばしば気がふれ、感覚や悟性、ときにはすべてを奪われ、それは一定期間ですむ場合もあれば、死ぬまで続くこともあり、そうなると回復は無理である。ミデアン人たちは、士師ギデオンの戦士たちの急襲に恐れ慄いたのが、ギデオン軍は各人がもっていた壺を割ることで敵を驚かせただけであった。またハンニバルの軍勢も、ローマの城壁を見ただけで、その凄さに圧倒されて恐慌状態に陥り、敗走を余儀なくされた。皇后リウィアはウェルギリウスが悲劇的な一節「**お前もマルケルスとなるだろう云々**」を吟じるのを聞いただけで、卒倒して死んでしまった。デンマーク王エリックは突然耳にした音によって「仕えていた人々もろとも狂気に陥った」（克蘭ツ、『年代記』5巻）、またアレクサンドロ・ダレッサンドロ（3. 5.）も参照。デ・カステロ・ブランコは悪い知らせを聞いたために癲癇になった患者について記している（『百の治療法』90.）。カルダーノも木霊を何かと勘違いして正気を失った人物に会ったことがある（『靈妙さについて』18巻）。このようにたった一つの感覚だけでも心が激しく乱れるのだとしたら、地震や雷鳴、稲妻や嵐など、聴覚と視覚とあらゆる感覚が同時に乱される場合、どう考えればいいだろうか。ペロアルドが後世に伝えるため『地震論』に記述しているとおり、1504年、日没から約11時間後、イタリアのボローニャで恐ろしい地震があった。都市全体が揺れ、人々は世界の終わり、「**人類の滅亡**」かと思ったという。恐ろしい音がして、強烈な悪臭が漂い、住民たちは大いに慄き、気が狂う者もいた。この地震について、ペロアルドは「**ぞっとするようなことを耳にしたのだが、それは年代記に載せる価値のある話である**」と続ける。「私には当時、フルコ・アルジェラートという召使がいた。この男は、勇気があってしっかりした人物だったのだが、この地震でひどく脅えてしまい、まず憂鬱症になり、その後呆けてしまい、最後には狂い、自殺してしまった」。日本の伏見でも「大きな地震があり、突如闇につつまれ、多くの人が頭痛に悩まされ、哀しみと憂鬱で押しつぶされてしまった。その都では町と大きな宮殿がすべて同時に崩れ去り、雷のような恐ろしい音がして、悪臭が立ち込め、人々は恐怖のために髪の毛が逆立ち、激しく動悸し、獣たちも信じられないほどに脅えた。また別の町の堺でも、この地震が恐怖をもたらし、多くの人が感覚を奪われ、恐怖の光景におかしくなってしまう、前後不覚となった」。この地震を報告するキリスト教徒のブラシウスという人物は、彼自身脅えてしまい、その地震から二か月たっても、本来の自分を取り戻せず、地震の記憶を頭から消し去ることができなかった。多くの場合、こういった恐ろしい出来事に出会うと、何年たっても、あるいは死ぬまでずっと恐怖が続く。そのことについて誰かが言及したりすると、そのときの恐怖を思い出したり、考えたりしてしまい、震えが戻ってくるのである。コーネリアス・アグリッパはパリのギヨームを典拠に、医者に処方された下剤があまりに不味かったために動揺し、「その後下剤を見るだけで取り乱してしまう」人の話を伝える。その後、長きにわたり、この男は下剤の匂いを嗅がなくても、下剤の箱を見ただけでお腹を下してしまった。いや、それを思い出すだけでおかしくなったという。プルタルコス曰く「砂で生き埋めになった経験のある旅人や座礁の経験がある船乗りは、その後ずっと、自分が経験した災難だけでなく、似たような



危険は何であれすべて恐れるようになる」。

#### 4節4項

#### 憂鬱症を惹き起こす軽蔑、悪口、ひどい冗談。

古い諺にあるように、「言葉による一撃は剣による一撃よりも傷が深く」、他のあらゆる災難と同じくらい、誹謗、毒舌、悪質な冗談、中傷、当て擦り、諷刺、譬え話、警句、演劇などに悩まされる人は多い。君主と権力者たちは、これ以外の点では幸せで、すべてを支配下に置き、憂いなく自由で、「その権力により、あらゆる災難を免れている」のだが、当て擦りの中傷や諷刺には激しく悩まされる。彼らは戦場の敵よりも毒舌のアレティーノの眷族を恐れるのであり、伝えられるところによると、アレティーノの時代の君主たちは、そのほとんどが、「かなりの額の恩給を彼に与え、諷刺で自分たちの悪口を言わせないようにした」。神々には、嘲りの神モーモスがいたし、ホメロスにはゾイロス、アキレスにはテルシテス、フィリッポス2世にはデマデスがいたし、ローマの皇帝たちは、よく誹謗に晒された。これまで、ペトロニウスやルカヌスの類が不足する時代はいまだかつてなかったし、これからもラブレーやユーフォルミオやボッカリーニたちはいなくならないだろう。教皇ハドリアヌス6世は、ローマの落首家たちが自分の像に悪口を貼って非難していることに、激しく傷つき、大いに悩み、自分の像を破壊して燃やし、その灰をテベレ川に投げ入れるように命じたという。ただ実際にこの命令は実行には移されなかった。というのも、御付きの道化ルドヴィコ・スウェッサーノが、そんなことをしても落首像の灰は川底でカエルとなり、これまでよりもさらにやかましく、もっとひどい悪口を騒ぎ立てるだろう、と言って教皇を思いとどませたからである。——彼らは「激昂しやすき眷属、詩人」、それゆえプラトンの描くソクラテスは「自分の信用を大事にする」友人たちに「詩人を恐れるように」と忠告する。「というのも、詩人はひどい連中で、好きなように誉めたり貶したりできるからである。このことから、剣による傷よりも悪口による傷の方が酷いことは明白である」。預言者ダヴィデは嘆く。「我が魂は、富める者の軽蔑と驕る者の侮蔑とで満ち溢れている」(『詩篇』123. 4)。「悪意ある人らの声と憎しみのため、我が心は我がうちにて震え、死のそろそろの恐怖に襲われる。恐怖、恐るべき恐怖なり」(『詩篇』55. 4)。「誹りが我が心を砕き、悲哀に満ちる」(『詩篇』69. 20)。このような不満の種がまったくなく、悩まされることなく、人から悪口を言われない人などいない。というのも、多くの人はひどく短気になりがちな種を蔵し、あの痛烈で、馬鹿げた、嫌味という人物がしばしば口に立ち現われ、バルダッサーレ・カスティリオーネが指摘するように、「口を開くと必ず、嫌味を言う」。彼らは冗談が受けるためなら、喜んで友達を裏切る。どんな人と交わっても、彼らは自分より劣る者を軽蔑して馬鹿にし、特にいろんな意味で自分たちに依存している人たちに対しては、調子にのせたり、ひどいことを言ったり、かついだりするので、しまいには、その冗談といたずらのせいで、「馬鹿から狂気」になってしまう。つまり、うすの

ろか頓馬になってしまうのだが、それもすべて、彼らが楽しみたいがためだけ。

——笑ってもらうためならば、  
友達が減るのも厭わない。

友人も敵も、そのどちらでもない人もお構いなく、馬鹿な人を狂わせるのが、彼らの楽しみであり、他人を馬鹿にして軽蔑することに無上の喜びを感じる。彼らはアプレイウスの物語に出てくる人々とともに、一日に一度、笑いの神に生贄を捧げねばならず、そうでなければ、彼ら自身が憂鬱症になってしまう。彼らは自分の聴衆を喜ばせるためならば、どんなに他人を虐げたり、ひどく言ったりしてもお構いなし。事実、彼らの機知は、ただ一つの目的のためだけに用いられる。つまり、人をからかい、毒舌を言うことであり、それはキケロ曰く、「知性のもっとも軽薄な喜び」、知性の泡であるのだが、この点で彼らはしばしば称讃される——彼らの話は、他の点では無味乾燥で、不毛、藁のように空虚で、鈍くて重苦しいのだが。彼らの機知はこの点にあり、この点でのみ優れているのであって、人の悪口を言って喜び、それを聞いて喜ぶ人もいる。かの嘲笑好きの教皇レオ 10 世は、ジョヴィオによる伝記 4 巻に記されているように、愚かな連中をおだてて調子にのせることに、並々ならぬ喜びを感じ、そういった連中を「誉めたり、説得したりして」あれこれとさせ、騙してからかった。彼は「頓馬を馬鹿に、大馬鹿に、馬鹿を狂人に」したのである。この伝記には、顕著な例が一つあげてあって、それはパルマのタラスコムスという音楽家についての話である。この音楽家はレオ 10 世とその助手のビビエーナにおだてられ、自分こそがもっとも優れた音楽家だと思っていたが、その実は頓馬だった。二人は「彼に馬鹿げた曲を創らせ、馬鹿げた技法を新たに考案させ、それを二人して大いに褒めた」。たとえば、より甘美な音色が出るからといって、笛を演奏する腕を縛ってみたり、「壁との反響によって声がよりくっきりするからといって、アラス織のカーテンを垂らさせたりした」。同じように、二人はガエタのバラバリウスという詩人を、ペトラルカと同じくらい優れた詩人だとおだてて騙し、馬鹿げた詩を唄わせた。彼らはこの詩人を桂冠詩人にすると言って、その就任式に彼の友人を全員招待させて、その馬鹿げた詩を吟じさせた。この哀れな詩人は騙されて、自分の詩が優れているとうぬぼれていたのも、しっかりとした友人たちが、彼の詩の愚かさを指摘すると、彼は激昂し、「やつらは私の名誉と成功を妬んでいるのだ」と叫んだという。ジョヴィオが付言するように、六十歳にもなる立派で真面目な老人が、こんなにも簡単に騙されてしまうのは不思議である。しかし、こういった嘲笑家たちにできないことなどないのである。その嘲笑の相手が野暮な人である場合は特に。実のところ、賢明でしっかりといて、おだてにのりそうにない人こそ、機知の優れた人の手にかかると思われてしまうのである。ただ、人を狂気に陥れる人も、自分がかつがれると、自分自身、同様に狂ってしまい、苦しみ、苛まれることとなり、あの喜劇の登場人物とともに叫ぶこととなる、「まったく、お前は俺を狂わせやがる」と。というのも、こういう場合、あらゆることが嘲笑者の意のままとなるからである。もし馬鹿な人がいて、そのことに気が付いていな

いとする。そうであれば、その人は他の人を楽しませ、自分自身、少しも悩むことがない。しかし、その人が自分の愚かさに気付く、そのことをひどく気に病んでいるとする。すると、いかなる鞭よりも苦しめられることになる。ひどい冗談や、中傷、誹謗は、いかなる損失、危険、肉体的苦痛、怪我よりも深く、その人を突き刺すのである。ベルナルド曰く、中傷は矢よりも「軽々と飛び、それでいて、その傷は重い」。特に中傷の言葉が辛辣な舌から発せられた場合、ダヴィデ曰く、「諸刃の剣のように」切り裂き、「彼らは矢のように辛辣な言葉を放つ」（『詩篇』64. 3.）。「そして彼らは舌を使って打つ」（『エレミア』18. 18.）のであり、その打撃は激しく、決して癒えることのない傷を残すのである。この武器によって台無しにされる人は多く、気が塞ぎ、意気消沈し、決して回復することはない。そして、あらゆる人の中で、実際に憂鬱症に罹っている人や、その傾向にある人は、疑心暗鬼で、怒りっぽく、間違いもしがちなので、この手の傷に対してもっとも敏感であり、抵抗力がない。彼らは自分に向けられた中傷をさらに大きくし、常にそのことを考えてしまうので、まるで絶え間ない腐食剤となり、時が風化させるまで、決して取り除かれることはない。もしかすると、嘲笑はしても、ひとりで楽しんで喜び、人には言わない人がいるかもしれない。これは「人の狂気を楽しむ最良の方法」ではあるが、人を嘲笑することは、トマスによれば重大な罪であり、預言者ダヴィデが「嘲笑する者は、決して神の館に住むことはできない」と一喝していることを忘れてはならない。

したがって、このような口汚い冗談や侮蔑や当て擦りはまったく避けるべきである。特に、我々の目上の人たち、あるいは苦難に陥っている人たち、いろんな意味で悩んでいる人たちに向けるべきではない。というのも、こういった人たちに向けられた場合、「苦しみの増大が起こり、そして多くの場合、恥辱と怒りなどが生じ」、これほど憂鬱症を惹き起こし、助長するものはないからである。マルティン・クロマの歴史書6巻に、これと関連する面白い話が載っている。ポーランド国王ウラースロー2世とシュライン伯ペーター・ダンの二人は、夜遅く狩りをしていて、粗末な小屋で宿泊しなければならなくなった。床に就くと、ウラースローは伯爵を、君の奥さんは君よりもシュラインの僧院長と昵懇だったそうじゃないか、とからかうと、伯爵は我慢できず、「あなたの奥様もドベッススと仲良かったそうじゃないですか」と返答。ドベッススとは宮廷の若い色男の紳士で王妃クリスティーナの愛人だったのである。「この言葉は国王の魂に触れ」、その後、何か月もの長きにわたって国王は「悲しみ、塞ぎ込んだ」。しかし、この言葉によって破滅をもたらされたのは伯爵の方だった。というのもクリスティーナ王妃がこのことを聞きつけると、彼女は伯爵を死刑にしたからである。皇帝ユスティニアヌスの妻、皇后ソフィアは、宦官のナルセテスを辛辣に馬鹿にしたことがあるが、この宦官は、その時でこそ、先の敗北でおとなしくしていたが、有名な指揮官であった。女王はここぞとばかり、お前は剣を振るうよりも、糸紡ぎの方が向いているとか、軍の将軍をしているよりも、女たちと仲良くしている方がいいとか言って馬鹿にしたのだが、このために彼女が払った代償は高くついたと言える。というのも、将軍はこの扱いにひどく腹を立てたので、敵の陣営に向かっていっても頭が乱れたままで、ロンバルディ

ア人たちの叛乱の引き金となり、結果、国家に多大な災厄を生み出すことになったのだから。皇帝ティベリウスは、前任者アウグストゥスが死ぬときにくれた遺産をローマの人たちから隠していた。あるとき、死体の耳もとで囁く男がいるのに気付くと、なぜそんなことをするのかと、尋ねざるを得なかった。その男は、身体から離れたばかりの魂に、ローマの共有財産がいまだ支払われていないと、アウグスティヌスの魂に告げるよう頼んでいたのです、と皮肉を言った。このために、その男は皇帝によって殺され、その秘密も闇に葬られたのである。時と場合をわきまえた冗談や、道化の必要性を認める人たち（そうでない人などいないのだが）は、「コドロスの脇腹が破裂するほどに」笑って楽しく過ごすことができる——この場合は健全で適切——のだが、自分たちの仲間うちでは、いかなる場合も冗談を認めようとしない人たちは、あらゆる意味でこの病気に罹りやすく、「惨めで塞ぎこんだ人」といるときには、冗談を言うべきではない」。これはカスティリオーネによる警告の言葉であるが、ポンターノやカーザなど、善良な人はみな同様に忠告する。

僕と遊んでくれ、でも傷つけないでくれ。

僕を笑わせてくれ、でも辱めないでくれ。

友愛が御世辞と口論の間にあるように、機知という徳は、野暮と悪ふざけという両極端の中庸にあり、度を越してはならず、常に無辜グザを伴わなければならない、「どんな傷も与えることを避け、誰も傷つけることはない」。よからぬことをしたり、それがばれたりした人が冗談や中傷の対象になりやすいのは確かだが、そのためにその人を責め立てたり、顔を殴ったり、軽蔑したりするのは、マナー違反であり、人間性にもとる行為である。古い諺にもあるように、「どんなときも、責め立てるのはよくない」。私がここで問題にしているのは、バークレイ、ジェンティーリ、エラスムス、アグリッパ、フィッシャルトといった悪徳一般を批判する人たち、現代におけるウェアロ派、ルキアノス派、諷刺家、警句家、喜劇作家、諷諭家などではなく、物真似をしたり、毒づいたり、嘲笑したり、誹謗したり、名指しで非難したり、面前で責めたりする連中のことである。

厚顔無恥な愚かさで冗談を言うものは、

セスティウスではなく、駄馬カバツルスにすぎない。

これは悪ふざけホース＝プレイであって、カーザ曰く、この手の冗談は「傷害と変わりなく、咬みつき、突き刺すのであり」、しかも毒針で刺し、刺された側には針が残るので、用いるべきではない。

盲目の人の前に、足を踏み出し、転けさせてはならない。

また、自分より弱い弟を故意にいじめてはならない。

また、死んだ人の悪口を言って、傷つけてもいいけない。



人が倒れるのを見て喜んではいけないのだ。

上記の規則が守られているのであれば、我々の生活は今よりも安寧であり、憂鬱症に罹る機会も少ないだろう。だが、事実はこれと反対であり、我々はこぞって互いを傷つけようとし、相手を刺し、悩ませる方法を学び、その様はまるで、喧嘩する二匹の猪であり、互いの魂を痛めつけるためには、全精力を傾け、叡智を結集し、友人を裏切り、財産を投げ打つ。このため、我々の生活には、満足と慈愛が欠け、あるのは辛辣さと憎しみ、悪意と不穏ばかりである。

#### 4節5項

##### 憂鬱症を惹き起こす自由の喪失、隷属、投獄。

この憂鬱症の原因目録には、自由の喪失、隷属、投獄も加えられるべきである。これらを、他の原因にも増して、大いなる苦痛の種だと考える人がいるのだから。この種の人々は、すべてをほしいまま、贅沢な家を自由に使うことができ、そこには綺麗な散歩道、庭園、甘美な東屋、回廊があり、食事豪勢で、すべてがその贅沢に応じているのだが、それでも、満ち足りることはない。というのも、彼らは監禁状態にあり、自由に出歩くことを禁じられているからである。自分たちが欲しいものを手に入れ、好きなようにしているのだが、「他人の食卓」で暮らし、他人の指揮下にあるからである。食事の席がこの有様なことから、土地や社交や遊戯などあらゆることも然り、彼らは決して楽しまず、家が広いと思わず、完全だと感じず、うまく行っていると考えない。あるのは「あらゆることに対する食傷感」だけである。イスラエルの子らはマナに飽き飽きした。彼らはまるで鳥籠の中の鳥、犬小屋の中の犬のように生きることにうんざりし、生活に飽き飽きするということである。もちろん、他の人から見ると、彼らは望むもの、欲するものすべてを手に入れているのだから、幸せなのである——「彼ら自身、自分たちの富に気づけばいいのに」。しかし、彼らはその生活を忌み嫌い、現状に飽き飽きしている。変化、喜び、つねに「新しきことを求めるのは人の性」。そして我々のふらふらとした感情は、この点に関しては定まることなく、たとえ最悪の方向に向かっているとしても、変わらなければならない。独身者は結婚しなければならないと思うし、既婚者は独身に戻りたいと思う。彼らは自分の妻を愛することはない。たとえ美しく、賢明で、美德を備え、妻たる資格を満たしていたとしても、妻は自分のものだからである。現状は常に最悪なのであり、我々はその生き方を長く続けることができず（「ついさっきまで求めていたものを嫌う」）、一つの職を長く持続できず（「その名誉を享受しても、やがて嫌になる」）、一つの場所に長くとどまることに耐えられず（「風のごとく移ろいやすく、ローマにあってはティブールを、ティブールにあってはローマを恋しく思う」）、切に求めていたものを、今や軽蔑するのである。セネカ曰く、「こうして死に駆り立てられる人がいる。現状を変えようとして同じ場所をくるくる回るが、そこから抜け出して新しい場所へは行けない。すると人

生と世界に変化がなくなり、飽き果て、放縱を尽くした挙げ句、思うのだ、『いつまで同じなんだ』と」。まるで碾き臼につながれた馬、輪を回し続けさせられる犬のように。マルクス・アウレリウスとソロモンは、世俗のあらゆる喜びと快樂とを経験したが、同じような告白をした。自分たちが欲したのは、結局のところ、退屈なもので、欲望は決して満たされることはなく、すべては虚しく、心に苦痛をもたらした、と。

このように同じ遊戯ばかりして辟易したり、同じ食事が続いたり、同じ場所に縛られていたりすることは、死そのものであり、第二の地獄なのである——他の点では欲するものをすべて手に入れることができ、他人から見ると天国にいるように思えるのだが。それでは、奴隷、あるいは囚人として生きる人々の苦しみと不満はいかなるものであろうか。ヘルマオスがアレクサンドロス大王に言ったように「奴隷として生きるのは、死より辛い」（クルティウス）。キケロによると、「勇敢なる者は皆、この悲惨さをよく知っているので、奴隷になるくらいなら死を選ぶ」。ポテロ曰く、「実際、私としては、隷属状態はあらゆる災厄の極みだと思う」。はたまた、厳しい監督者のもと、金鉱（ペルーのポトシ山における三万人のインディオ奴隷のように）、錫鉱、鉛鉱、採石場、炭鉱などで、地下に蠢くモグラの大群のごとく、奴隷船に載せられ、延々と肉体労働を強いられ、解放の見込みなく、鞭打たれ、飢えと渇きの生活を強いられる人々が耐える不幸はいかなるものか。一年のほとんどを家の中で過ごさなければならないトルコの女性たち、あるいは嫉妬深い夫によって、鷹籠の鷹のように監禁状態にあるイタリア、スペインのご婦人方はどれほど苦しんでいるだろうか。アイスランドやモスクワや北極付近に住む人たちは、半年間は夜が続くわけで、一年の半分はストーブにあたりながら、穴倉のような生活をしなければならないのだが、どれほど退屈であろうか。いや、それよりも牢獄で過ごす生活は、どれほど辛く、耐え難いものなのだろうか。彼らには六つの非本性的事項がすべて不足している。空気は悪く、食事も粗末、運動もできず、仲間もおらず、睡眠、休息、安寧もままならない。一日中、鎖につながれて、空腹に苦しみ、ルキアノスが言うように、「囚人たちがもたらす、汚らしい悪臭、鎖のジャラジャラいう音、咆哮と哀れな悲鳴に耐えなければならないのだが、とても厄介で、我慢できるものではない」。彼らは、汚らしく蝦蟇や蛙にまぎれて横になり、暗い地下牢の中、自分の糞尿にまみれ、心身ともに苦痛を感じる。『詩篇』105章18節にあるように、「彼らは足枷でヨセフの足を傷つけ、その鉄の鎖はヨセフの魂をつらぬいた」のである。彼らは仲間から隔離され、ひとり孤独に生きる所以、伴侶は心を蝕む憂鬱症のみ。食事不足のため、苦痛というパンを食べねばならず、自分自身を餌食とする。アルコールは、長期にわたる獄中生活、特に、それまで陽気で、官能と肉欲に満ちた生活をしてきた人たちが、突然、そういった快樂をすべて奪われ、投獄された場合、憂鬱症の原因となると正しく指摘している。たとえば、ハンガリーのフニャディ将軍、エドワード2世とリチャード2世、皇帝ワレリアヌス、トルコのバヤジト1世などがその例である。いつもの仲間が一時間いかなかったり、一日に一度だけ食事を抜いたりするのが退屈なのだとしたら、これらが全部、永遠に失われてしまうとしたらどうだろう。自由に暮らし、世界が与えてくれる

さまざまなものを享受することは、大いなる楽しみであるが、いきなりスペイン異端審問にかけられたり、天国から地獄へと堕ちたり、突然、監禁されたりする人の悲惨と不満たるや、いかほどのものであろう。どれほど困惑するだろうか、どうになってしまうだろうか。ノルマンディ公ロベールは、末弟アンリ（後のヘンリ1世）から監禁され、マシュー・パリスの伝えるところによると、「その日以来、牢獄で、癒えることのない悲しみでやつれ果てた」。かの気高き將軍ユグルタは「戦利品としてローマに連れて行かれて投獄され、魂の苦悩のため、憂鬱症になって死んだ」。ソールズベリ司教ロジャーは、国王スティーブンに次ぐ人物であったが（彼こそはかの有名なウィルトシャーのデヴィアーズ城の建城主）、投獄され、飢えと投獄に伴うあらゆる苦難に苛まれ、「生きることも望まず、さりとて、死ぬことも叶わず」、死の恐怖と生の苦しみの間を行き来させられた。フランス国王フランソワ1世はシャルル5世に捕まって投獄され、その瞬間に、グイッチャルディーニ曰く、「憂鬱症となり、死なんばかりだった」。しかし、このことは、太陽のごとく自明な理であるので、これ以上の例証は不要である。

#### 4節6項

#### 憂鬱症の原因としての貧困と困窮。

貧困と困窮は、攻撃的な乱暴者にして招かれざる客、あらゆる人から激しく嫌われているので、ここで個別に論じないわけにはいかない。正論を言えば、賢明で、悟性があり、真に更生し、満ち足りた人にとって、貧困は神の賜物、祝福された状態、クリュソストモス曰く、天国への道、謙遜の母であり、後に論じるように富よりも大いに好まれるべきなのだが、それでも、世俗の基準に照らしてみれば、激しく嫌われる宿命、卑劣で下等、苛烈な拷問、究極の悪行、とても耐えられない重荷である。我々はみな犬や蛇よりも激しく貧困を避け、その名を嫌う。

貧困は忌避され、全世界で疎んじられる。

貧困は、他のあらゆる不幸、心痛、嘆き、労苦、不満などの源泉だからである。貧困を避けるために、我々はあらゆる苦勞を惜しまない——商人は最果てのインドまで駆ける。世界中の港、海岸、入江を隈なく探す。たとえ命を危険に晒すとしても、海の底に潜ったり、五百、六百、七百、八百、九百尋もの地底深く掘り進んで行ったり、五つのあらゆる気候帯、極寒から灼熱の場所を訪れたりする。この貧困という忌々しい頸木に耐えるくらいなら、我々は食客や奴隸になり、身を売り、罵り嘘をつき、自分の心身を呪い、神を見棄てて信仰を棄て、盗み、強盗し、殺人することを厭わない。貧困は我々を虐待し、責め苛み、しばしば塞ぎ込ませるからである。

というのも、この世を見わたしてみたまえ。たいていの場合、人々はその資産に応じて敬意を

払われ、金持ちほど幸せだということがわかるだろう。「どこに行っても、多くを所有する者は誰もが、偉大であった」。金持ちになる見込みがあり、出世街道まっしぐらであるとしたら、そんな人ほど幸せな人はいない。世間では、裕福であれば、その人がどうやって富を手に入れようとも、いかなる出自であっても、どんな資質であろうと、美德に恵まれず、悪徳の傾向があっても——女衒、守銭奴、高利貸し、悪漢、異教徒、野蛮人、卑劣漢、ルキアノスが言う「太陽を直視するよりも危険な」暴君であったとしても、その人が金持ち（かつ気前のよい人）でありさえすれば、称讃され、崇拜され、崇敬され、敬意を払われ、大いに崇められる。「富める者は、その資産ゆえに評判がいい」（『集会の書』10. 31.）。味方も多い。「というのも、金持ちは多くの友を集め」（『箴言』19. 4.）——「多くの友を数え上げる」からである。幸せはすべて、金とともに浮き沈みするのである。金持ちであればその人は、仁愛深き殿下、庇護者マエケナス、恩人と呼ばれ、賢く、思慮深く、礼儀正しく、勇敢で、幸運で、寛大な精神の持ち主、ユピテルに愛されし者、白き雌鶏の子と考えられ、前途有望で、善良、美德を備え、正直な人と見做されるだろう。キケロはオクタウィアヌスについて「私はいつお会いできるでしょうか、ユノーの子であり、母君にとっては正に黄金の息子であるあなたに」と言ったことがあるが、カエサルの子となり、偉大な君主の後継者となるのが明らかであったオクタウィアヌスは、黄金の子供だったのである。金持ちにはあらゆる名誉、役職、偉大な称号、大袈裟な呼び名が与えられ、拍手喝采され、「あらゆる人がありとあらゆる誉め言葉を捧げ」、衆目はすべて彼に注がれる。神よ、善良なる閣下とその名誉を祝福したまえ。誰もが彼をよく言い、彼に贈り物をする。誰もが彼に愛され、寵愛を受け、庇護されることを求め、彼に仕え、彼のものとなることを望む。彼はオリンピックでテミストクレスが受けたような喝采を受け、口を開けば、ヘロデ王のごとく、「その声は人間のものではなく、神のものである」と称えられる。金持ちにはあらゆる美点、資質、快楽、気品が随行し、黄金の幸運も彼に付き添い、同衾する。ローマ皇帝たちがそうであったように、その寝室には幸運の像が置かれているのである。富める者は

——順風満帆で航海をし、

幸運の女神を意のままに操れる。

神のごとき楽しき日々、きらびやかな生活も思いのまま、甘美な音楽を演奏させ、絶品の御馳走を食べ、持ち物はすべて上等、肥沃な土地を所有し、着るものは高価で美しく、ベッドは柔らかく、枕は羽毛製。彼のために、世界中の人々が働くのである。数千人もの職人たちが、彼の奴隷となって骨折り、走り回り、馬を駆って使い走りする。神官——デルポイの神官もマケドニア王フィリッポスの御用聞きに成り下がり——、法律家、医者、哲学者、教師を所有し、すべて自分のためだけに仕事をさせる。誰もがお近づきになりたいと思い、また親戚になりたいと思うので、たとえその金持ちが醜く、頓馬で、化け物、木偶の坊であったとしても、縁談を持ち掛けるので、好きな時、好きな相手と結婚でき、「ダナエですら妻とすることができる」。また「国王と王妃も



彼を息子にしたいと願う」。息子、娘、姪などを結婚させるのに、金持ちは最高の相手なのである。「彼が歩いて踏みつけると何でもバラになる」。勝手気ままに歩いて行っても、ラッパと鐘の音が鳴り響き、あらゆる幸福が付き従う。誰もがもてなしたいと思うので、金持ちはどこへ行っても、アポロンの間でのような食事ができる。そのもてなしのために準備されるものは、海と陸とがもたらすすべて、魚に鶏、香辛料に香料などが用意される。金持ちを喜ばせるために、あらゆる料理が振る舞われ、瀟洒な仮装、陽気な演芸が行われる。

トレビウスにあげるんだ。それもトレビウスにわたせ。

なあ、兄弟、その腰肉も少し食べてみないか？——

そして善良なる金持ち閣下に差し出される食事も素晴らしい。

——甘美なリングと

君の畑がもたらす最良のものを、神々に捧げる前に、

敬虔なる金持ち閣下に味わってもらえ。

金持ち殿下たちが楽しむ遊びは、鷹狩、狩猟、釣り、鳥獵、雄牛いじめに、熊いじめ。カード遊び、サイコロ遊びに、闘鶏。演奏家、軽業師、バイオリン弾きに道化なども、善良なる金持ち閣下は顎で使う。美しい屋敷、庭園、果樹園、それからテラス、ギャラリー、キャビネット、さらに、心地よい散歩道、気持ちのいい場所など、すべて手中にある。「牛乳は金のコップ、ワインは銀の杯で飲み、美しい娘たちは思いのまま」のトルコの楽園、地上における天国である。繰り返しになるが、たとえ愚かでお頭が足りず、常識に欠ける人物であったとしても、財産を継承すべく生まれたならば、「生まれつきの権利によって賢く」、勇敢で思慮深くなるべく定められ、必ず名誉と役職とを得るのである。「名誉を受けるのは金持ちだけ」（アンブロシウス『聖職について』21）。金持ちは名誉を得ることになっているのだ。「法律家なら、末はセルウィスからベオか」。十分な金を得て、王国、教会管区、軍隊、人心、労働力、人気をほしいままにしてみたまえ。そうすれば法王たちを自分の専属の牧師にし、君主たちを自分の取り巻きにするだろう。タンバレンのように国王たちに自分の馬車をひかせ、王妃たちを自分の洗濯婦、皇帝たちを踏み台にし、アレクサンドロス大王よりも多くの町と都市を築ことができるだろう。バベルの塔、ピラミッド、マウソスの墓標のような巨大なものを幾つも建造し、天と地とを支配し、世界を自分の臣下とすることができるだろう。「王冠は黄金で買うことができ、天国の門は銀で開かれる。哲学者ははした金で雇うことができ、司法も金で操れる。文人も小銭で買収でき、健康も金次第、友人をつなぎとめるには銅貨で十分」。したがって、かの裕福なフィレンツェ人ジョヴァンニ・デ・メディチが、臨終の床に二人の息子コジモとロレンツォを呼びつけ、いろいろと真面目な話をしながら、次の言葉を繰り返したというのは故なきことではない。「安らかな気持ちで死んでいけ

るよ。お前たちを健康で金持ちにして残していけるのだからね」。というのも、富がすべてを支配するからである。プルタルコスによればスパルタ王リュクルゴスは「最良の人、もっとも美德を積み、その地位に値する人を選任した。足の速さや腕力や富など、当時のスパルタの政治家たちが重んじたものは考慮せず、最良の中の最良、美德ある者の中でも最高に美德のある者を登用したのであった」というが、こんなことは我々の時代にはあてはまらない。貴族政治など、今は空論にすぎず、あるのは寡頭政治ばかり、少数の金持ちたちが支配権を握り、自分たちの好きなようにし放題、その偉大さによって特別扱いを受けているのである。彼らはしたいようにし、罪を犯しても罰せられない。というのも、誰も彼らを告訴する勇氣はないし、それどころか文句すら言えない状態。何をしても気付かないふりをしてくれるので、彼らは安全なのであり、自分たちの法に従って生きている。恩赦状や免罪符なら金で買うことができるし、それで彼らの魂は煉獄、いや地獄に落ちずにすむ——金庫は神をも閉じ込めるのである。たとえ彼らがエピクロス派、無神論者、不可知論者、マキャベリ主義者であったとしても（事実、多くの場合そうなのだが）、

また、ひどい嘘つきで、生まれが低く、残忍であっても、

針の穴を通して天国に行くことができ、望みさえすれば、列聖してもらうことも可能。称えられて巨大な墓標に埋葬され、詩人たちからも讃辞を贈られ、その名は歴史に刻まれ、寺院や彫像が建立される——そしてその遺灰からは、堇の花が咲くのである。——生前から惜しみなく与え、死の床においても気前よくしておけば、タキトゥスが皇帝クラウディウスの死の場面で描写するように、自分の葬式の際に、さくらを仕込み、魂が天国に昇っていくのが見えたと言わせ、大いに嘆かせることができる——「踊り子と楽団」を雇うことも可能。ペトロニウスに出てくる「トリマルキオンのすべてである細君は、まっすぐ天に昇っていった」。もとは卑しい売春婦で「昔だったら、あんたも、どんなに困っていたって、軽蔑してあの女から金をもらおうなんて考えなかったはずさ」。それがどうだろう。今や「あの女は升で金を量る」大金持ち。今述べたような特権を使うのは、たいていの場合、実際に金持ちの人ではなく、外見が金持ちに見える人たちである。ある人にいい服を与えて、それを着させてみれば、その人は神として崇められる。ちょうどペルシア人たちの間で、キュロスが「その素晴らしい衣装のおかげで」崇められたように。現在は、ほとんどの人がその服装によって評価されている。この愚かな時代にあっては、もしかすると恭しく席を譲った相手も、その服装に騙されて、こちらの方で尊敬すべき偉人だと思い込み、それを信じているだけかもしれない。ただ、よくよくその人の資産を調べてみると、実は偉くもなんでもない召使、あるいは床屋閣下、仕立屋殿下夫人、詐欺師、劇に出てくるファスティディアス・ブリスク、ペトロネル・フラッシュ卿の類、単なる上辺だけの人間だったりすることが多い。この手の人に与えられる敬意は高が知れているが、それでも、その服装のおかげで、どこに行っても、望みのものを要求できるし、席も譲ってもらえる。

しかし、反対に貧乏な場合、「毎日がみじめ」（『箴言』15. 15.）で、落ちぶれて、意気消沈、拒絶され、見棄てられ、財布が乏しいと心も乏しい。「我々は財産を手にとると、同様に魂も手にする」。生活も魂の状態も、金次第なのである。たとえ誠実で、賢く、学識もあって、資質も十分、生まれも高貴、多才で有能な人物であったとしても、その人が貧乏であれば、成り上がれることはほとんどなく、名誉、役職、財産とは無縁、軽蔑されて無視される。「賢くても認められず、学を積みながら飢える厄介な友人」。「口を開いても、戯言だと無視される」（『集会の書』）。高貴であっても富がなければ、「岸に打ち上げられた海草以下」、評価されることはない。「我々は幸薄き卵から生まれた価値なき雛」。一旦貧乏に陥ると、すぐさま、卑しい奴隷、悪漢、惨めな重労働者に成り果ててしまう。というのも、貧乏とは、すなわち、ごろつき、愚か者、卑劣漢、忌むべき輩、唾棄すべき連中、目障りと同意であり、貧乏と言え、これら全部を言ったことになる。彼らは生まれつき重労働を強いられ、惨めで、役畜のごとく荷を運び、オデュッセウスの部下たちと一緒に「糞尿まみれの餌を喰らい」、アリストパネスに出てくるクレミュロスが貧乏の不満として列挙するように、「塩をなめ」、便所掃除、どぶさらい、汚物と肥しの運搬、煙突掃除、馬蹄磨きなどを強いられる。役畜のように売買されるトルコのガレー船奴隷、アフリカの黒人、インドの貧困労働者たちについては言うまでもない。「彼らはそこで毎日、荷物を運んでは、倒れていく。というのも、惨めなインド人たちはみな、我々が牛やロバに運ばせるような荷物を運んだり、引っ張ったりしているからだ」。その姿は見るもおぞましく、かつては小ぎれいだった連中も、貧乏になると、すぐに錆びつき、汚らしくなる。「財産がみすぼらしくなれば、それに伴い、姿もみすぼらしくなる」というが、そうなるのが当然である。人は生きるために食べるのが常だが、彼らは苦役をするために生きている。「奴隷根性の染みついた惨めな連中は、どんな仕事であれ拒む気持ちすらもてない」。

——おい、ドローモ、俺たちが水浴びしている間、  
この扇子を持って、風を送ってくれ。

この他にも、朝ちょうどいい時間に主人を起こす仕事、翌日には天候に拘わらず、50 マイルも徒歩で駆けて行って、主人の恋文を届ける仕事など厭わず行。奴隷の「ソキアはパン屋へお遣い」したり、家では、一日中麦芽を挽く仕事に勤しみ、トリスタンは脱穀作業。彼らはかくのごとく命じられ、中にはなんと、金持ちが踏むための足台になったり、馬に乗るときの踏み台になったり、小便をするときの壁になったりする者までいる。彼らは普通、こういった連中で、粗野で愚かで迷信深い馬鹿、汚らしく不潔で虱まみれ、貧乏で、元氣なく、卑屈な奴隷。またアル・ファーシーがアフリカ庶民について書いているように、「生まれながらにして卑しく、主人の家では、犬の方が丁重に扱われている」。「惨めで、辛く、痛ましい人生を送り、貧しく、不幸で、ロバよりも愚かなので、その姿を見れば、きっと野獣から生まれたのだと思うだろう」。学問も学識も礼節も知らず、常識もほとんどなく、彼らにあるのは野蛮な生活のみ、ごろつきや浮浪者と同じで「野

獣のような暮らしぶり、服も着ず、靴も履かず」、裸足で出歩くので、足の裏は馬の蹄のように固い。またエジプトのダミエッタでラズィヴィウが目撃したところによると、彼らは辛く惨めで哀れで不幸な生活を送っており、「それ以下とまでは言わないまでも、野獣や役畜のようである」。実際、あるスペイン人はインカ帝国で、三人のインディオの少年をチーズと交換で売ったというし、馬を一頭買うのに百人の黒人奴隷を売ったという。彼らの言葉遣いは下品極まりなく、1杯のエールが彼らにとっての至福なのである。どんな屈辱的な仕事であっても、こういった輩は厭わない。「彼らの多くは便所掃除に従事、台所仕事をしたり、馬丁や潜水夫をしたり、その他、似たような仕事をやっている」。またアルプスに住む人々のように、煙突掃除、屎尿係、壁塗り、浮浪者などがいて、懸命に骨折り働いているが、それでいて着る服や食べるパンもままならない。というのも卑劣な貧困がもたらすのは、物乞いの生活、不快で不潔な日々、浅ましき、軽蔑、骨折り仕事、きつい仕事、醜悪と飢えと渴き以外、何もないからである。アリストパネスのクレミュロスがあげつらうには、「たくさんの虱と蚤」に囲まれた生活、「羽織るのは檻褌、大きな石を頭にあてて枕とし」、「座るのは壊れた甕の上」か薪割り台、飲むのは水で、「パンとして食べるのは葵の枝」か豚の餌となる豆の類、あるいは犬の餌のような残飯。クレミュロスが締めくくりとして言うように、「かくのごとく我々の生活は今やひどい貧困状態にあるのだから、これを見て不幸で狂っていると思わぬものなどいないだろう」。

こういった卑しい連中、飢えに苦しむ乞食、浮浪者、いわゆる奴隷、日雇い労働者と変わらない悲惨な状態にある輩は、法律を破ったなどとして強権的な役人や暴君的な地主の餌食にされ、絶えず取り立てられて皮をはがれ、丸裸にされる。それゆえ、どんなに骨折って働き、守護神も飢えるほどかつかつの生活をしたとしても、生きていけない国もある。彼らは何かを手に入れたとしても、すぐさま取り上げられる。生きて、あくせく働き、貧しい家族を養っていくための気苦労と困難と不安とで「眠りを奪われ」（『集会の書』31. 1.）、生きていくのが嫌になる。またあらゆる努力をし、真っ当に働いてきたとしても、いったん病気になって使い物にならなくなった、何年も病気で働けなかったりすると、情けをかけてくれる人など誰もいない。人は薄情で無慈悲なもので誰も手を差し伸べず、彼らは落ち込む一方、果ては物乞いになったり、盗みを働いたり、不平をつぶやいたり、叛乱を起こしたりする。でなければ飢え死にするのを待つしかない。古代ローマのメネニウス・アグリッパが平定したことで有名な叛乱は、人々がこの惨めな状態に陥りそうだと感じ、それを恐れ、為政者たちに反旗を翻したものである。無法者や叛逆者たちは、多くの地で、叛乱の狼煙をあげているし、こういった人々はいつの時代、どの国でも、暴動、不満、騒乱、叛乱、強盗、殺人、謀反、衝突、闘争を繰り返してきた。いかなる家庭であれ、その職に応じて生きては、子供を養育する手段が欠け、そこには必ず遺恨、愚痴、不平、不満があり、思うようにならず、彼らの心は挫ける。たとえば貴族が騎士の、郷紳が郷士の生計しかなく、自分の生まれと地位に応じた生活ができないことほど悲惨なものはない。貧困と困窮はありとあらゆる種類の人間を誰彼なく蝕むものであるが、特にその餌食となるのは、羽振りのいい生活をし



ていたのに急に落ちぶれてしまった人、高貴な生まれで贅沢に育てられたのに、災難や惨事か何かに巻き込まれて激しく落ち込んでいる人である。そうでない人たちは、そもそも財産が少なく、それに応じた卑しい心しか持っていないので、フンコロガシのように、「糞の中で生まれ、糞を食べ、糞に喜びを見出す」。だからこの手の人々は貧困に蝕み尽くされることはない。

彼らの小さな心に渦巻くのは、小さな魂でしかない。

しかしながら、貧困は苦しみの原因としては小さいものではない。いったん困窮状態に陥れば、仲間から見棄てられ、無視されて、ひとりきりになってしまう。ローマのテレンティウスが哀れにも、スキピオ、ラエリウス、フュリウスという偉大で高貴なる友人たちに見棄てられたように。

プブリウス・スキピオ、ラエリウス、フュリウスという当時、  
貴族たちを簡単に動かすことができた三人はテレンティウスの役に立たず、  
彼は、作品の力だけでは、住み込みの家さえ見つけることはできなかった。

これが世の常、「雲行きが怪しくなれば、見棄てられ」、ひとりきりになって慰められることなく寒さに耐えることになる。「財産が失われれば、友達是谁も寄りつかない」。今にも頭上に崩れ落ちてきそうな腐った壁を目にしたかのごとく、みな逃げ出してしまう。「貧すれば、仲間外れにされる」(『箴言』19.4.)。

フォルトゥーナ  
僕が幸運の女神に恵まれていると、友達面するのに、  
女神が去ってしまうと、君たちは顔を背け、臆面もなく逃げ去る。

もっと酷いのは、貧乏な人が、みんなから軽蔑され、侮辱され、虐げられ、嘲笑され、その惨めさが助長される場合である。

家がよろめき、倒れ始めると、あらゆる  
重みが、その傾いた部分に押しかかる。

しかも自分たちの兄弟、親友からも忌み嫌われる。「貧乏であれば、兄弟からも嫌われ」(『箴言』19.7.)、「同胞からも嫌われる」(『箴言』19.20.)。喜劇の台詞にもあるように、「知ってる奴も知らない奴も、誰も俺に近寄ってきやしない」。「貧乏人の不幸の中でもっとも辛いのは、嘲笑の種をもっていることである」。彼らは、人々のからかい、あざけり、ひやかし、いたぶりに堪え、しかも、生活のためとはいえ、こういった仕打ちを受けても嬉しそうにしていなければならない。「貧困は、大いなる恥辱の種である。貧困に陥ると、何でもしなければならぬし、どんなこと

でも耐えねばならなくなるからだ」。貴族お抱えの幫間や道化になるものもいて、エウリピデス曰く「愚かな連中を愚かな所作で喜ばせる」。貧しいながらも生きていくため、奴隷やごろつきや肉体労働者たちは、人に笑われようとするのだが、喜んでもらってお金をもらえるときもあれば、気に入られず痛めつけられることもある。ちょうどホメロスのオデュッセウスが山羊飼のメラントイオスに罵られ、蹴られ、侮蔑の言葉を投げかけられたときのように。しかし、「強き者たちの愚行には耐えるしかなく」、文句さえ言えない。また悪人悪党になるしかないものもある。というのも、諺にもあるように、「**貧困は人を犯罪に駆り立てる**」からである。貧困という理由だけで、人々は強盗、叛逆、殺人、裏切り、暗殺を行う。「貧困ゆえに我々は罪を犯してきた」（『集会の書』27. 1.）。自分たちの得になり、自分たちの貧困が少しでも和らぐのであれば、彼らは神に宣誓した上で、何でも偽誓し、虚偽の目撃証言をしたり、嘘をついたり、ごまかしたりする。人は困窮すると「**罪へ悪へと教え導かれるのであり**」、それ以外はありえない。

——運命の女神がシノーンを貧乏にしたのであれば、  
その悪意の女神は、彼を不誠実な嘘つきにもするだろう。

貧乏人は父と君主と国家を裏切る。イスラム教徒になり、キリスト教を棄て、神への信仰を公然と放棄する者もある。アル・ファーシーによれば、これは「**報酬を期待して行われるものではなく、これほどおぞましい裏切りはない**」。プラトンは、貧困を盗人的で、冒険的、汚らしく、邪悪で、有害なるものと呼んでいるが、宜なることである。というのも、貧困でなければ高潔な人物でさえ、貧乏になると賄賂を受け取り、腐敗し、良心に反する行いをし、舌と心と手を裏切り、貧乏という現在の状態から抜け出すために、粗野で、残酷、無慈悲、非礼な行いをし、卑劣な手段を用いる。貧困になると、君主は臣下から取り立てるようになり、地位のある人は暴君的、地主は抑圧的になり、正義は金で買われ、弁護士は欲得の秃鷹、医者強欲なハルピュイアとなり、友は金をせびるようになり、商人は嘘つき、正直者は盗人、敬虔な人は暗殺者となる。貧困ゆえ、上流の人々は妻と娘を売春婦とし、自らも身売り、中流の人々は愚痴り、庶民は暴動を起こし、あらゆる人が文句を言い、不平を言い、不満を口にする。貧困は、あらゆる悪事へと人々を誘惑するものであり、こういった惨めな連中の中には乞食をするのにより説得力をもたせるよう、病気のふりをしたり、盲目や不具になったり、さらには四肢を切断する者もあるが、これもすべて現在の貧困状態を少しでも緩和しようとするためである。ブリュージュの法律家ダムハウダーの『犯罪例集』112章には、この手の騙しの手口の例がいくつも載っていて注目に値するが、我々の周りのどの村に行っても、唾のふりや狂ったふりをする乞食などについて多くの証言が得られるだろう。そして、不幸の極みなのは、貧困によって苦悩の人生を強いられ、人生に疲弊することで自ら命を絶ってしまう場合である。彼らは生活の糧なしに生きるより、首を吊ったり、溺死したりした方がましだと考える。

無慈悲な貧困に押しつぶされないよう、荒々しい海へ  
飛び込め、キュルノスよ、高き頸木から逃れるのだ。

アテナイオスの『食卓の賢人たち』に、スパルタで年老いたシュバリス人が、ピディティオンという共同食事に招かれたときの話が載っている。その老人は、ひどい食事が出されるのを見て、スパルタ人が勇敢なるのも宜なるかな、「わしなら、いやまともな精神の持ち主なら誰でも、こんなひどい食事を出されて、惨めな生活を送るくらいなら、戦いの場で死んだ方がましだっと思うだろう」と言ったとのことだ。また日本では、貧乏な家庭ならば、自分の子供を窒息死させたり、アリストテレス推奨の堕胎をしたりするのは、当たり前である。さらに、かの礼節名高い中国でも、貧乏で子供を育てることができない場合、母親が絞め殺す。その子を買ったり、貧乏人として惨めな生活を送らせたりするよりも殺した方がましだと考えてのことである。アルノピウス（『異端論駁』7巻）とラクタンティウス（5巻9章）が激しい不快感を表明しているが、古代のギリシア人とローマ人は、貧乏を理由に、子供たちを野獣に差し出したり、絞め殺したり、石に叩き付けて頭をかち割ったりしていたという。また、ミュンスターの記述を信じるのであれば、我々と同じくキリスト教国であるリトアニアでも、飢えと物乞いとを避けるため、金持ちの奴隷となるべく自ら身売りし、妻と子売り渡す人もいるし、貧困が極まって、自殺する人も数多くいる。ローマ人アピキウスは、自分の金を数え上げてみて、100,000 クラウンしか残っていないことに気づくと、飢え死にすることを恐れて自殺した。フォレストの『診察』にも、忘れがたい例が示してある。ルーヴァンに二人兄弟がいたのだが、生計を立てられず、ともに憂鬱症となり、鬱々とした気分のなか、二人して無残な死に方をした。もう一つの例は、ある商人に関するもので、その人物は学識あり、思慮深く、賢明であったのだが、商船が沈没して生じるかもしれない損失のことを心配しすぎておかしくなったのか、誰が何と言って諭そうとしても、ホラティウスのウェンティディウス同様、聞く耳もたず、自分は乞食になって死ぬのだと言い張っていたという。以上をまとめると、貧乏人については以下のように結論することができる。つまり、彼らにはたとえ優れた資質があったとしても、それを示すことも活用することもできないのである。「貧困から美德へと至る道は厳しく閉ざされていて」、「家の貧困のために美德を発揮することができず、成り上がるのは容易ではない」。「貧しき者の知恵は軽蔑され、その言葉が聞き入れられることはない」（『伝道の書』9. 16.）。貧乏人の書いた著作は、いかにその内容がすぐれて称讃すべきものであろうとも、その著者の身分が低く、無名であるという理由から、拒絶され、軽蔑され、手に取られることさえほとんどない。

水しか飲めぬ貧乏人の書いた詩は、  
その命短く、喜ばれることもない。――

貧乏人は人を喜ばすことなどできず、彼らの行動、忠告、相談、計画は、すべて世間で中傷される。

「金とともに正氣も失う」とグナトが喝破してから久しい。しかし、「サンダルや靴底の修繕を自分でやるような賢人はいない」と昔言った人がいるが、とても信じられない。現在は、むしろその逆こそが真、「雄弁家は素寒貧で震えている」。ホメロスでさえ、食べていけないときは、物乞いをしなければならず、伝えられているところによると、彼は時折、「少年たちを引き連れて一軒一軒まわり、バラッドを唄い」小金を稼いでいたという。このように普通、貧乏人は不幸であり、そのために必ずや心が乱れ、不満のうちに憂鬱症となる。また通例、彼らは旅をして疲れ果てた人のように、強情で、怒りっぽい。というのも、

飢えているのに待たされると、胆汁が鼻に上がってきて、

つねにぶつくさと文句を言っている。「貧乏ゆえに彼らは困り果て、気難しい」とプルタルコス  
はエウリピデスを引用しつつ言い、かの喜劇詩人テレンティウスも同意見である。

錢に恵まれない奴らは、どういうわけか、  
疑い深い。何を言っても馬鹿にされていると思うし、  
貧乏のせいで、自分が無視されていると信じてやがる。

それゆえ、もともと気前のいい人たちは、貧乏になると、人付き合いを一切やめ、引きこもってしまう。そして、このテレンティウスの晩年がまさにそうだったと言われている。貧乏ゆえに見向きもされなくなったことに気付くと、彼は進んで自らを追放の身とし、アルカディア地方のさびれた町ステュムパーロスに赴き、そこで惨めに死んだという。

——貧困の極みにまで達した彼は、  
人の目を避け、ギリシアのさびれた地へと向かった。

これも故なきことではない。というのも我々は、人を評価する場合、普通はその財力を基準とするからであり（人はみな「あの人は金持ちか」と訊くのであって、「あの人は善人か」と問う者は一人もいない）、ひどい服を着ていれば、中傷するからである。演説家ピロパエモンは、着ているものが粗末だったので、樵の仕事させられたことがあるし、テレンティウスもその粗末な服装ゆえ、ケキリウスの宴卓では末席に座らされた。それどころか、かの有名なイタリア詩人ダンテは、服装がみすばらしいという理由だけで、宴会の席に座ることさえ許されなかった。例の喜劇には、グナトがその衣装を理由に、旧知の友人を馬鹿にする場面がある。「俺は、ぼろ服に覆われた爺さんを見ると、自分と比べて、軽蔑してやるのさ」。史家リウィウスによると、征服された国王ベルシウスはローマ將軍パウルス・アエミリウスに手紙を送ったが、將軍は「国王の運命を馬鹿にして返信しなかった」という。かの偉大なるブルゴーニュ公爵シャルル豪胆公は、



エクセター侯爵位を剥奪されたヘンリー・ホランドを、まるで下僕のように扱い、馬の後を走ってついてこさせ、しかも、無視していたという。そして、これこそが世の定めなのである。ゆえに、貧乏な人々は、当然のごとく、満たされず、憂鬱症となり、その現状を嘆くこととなる。だからこそ、みな、ソロモンの句を唱えて祈るである。「主よ、私を金持ちにも貧乏にもすることなかれ。私には、私に必要な食事だけを与えたまえ」と。

\* 太字表記は原文がラテン語もしくはギリシア語であることを示す。

#### テキスト

(底本) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Oxford English Text)* (6 Vols.).

Ed. by T. C. Faulkner, N. Kiessling and R. L. Blair. Oxford: Clarendon Press, 1989-2000.

(参考) Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy (Facsimile) (The English Experience)*.

Amsterdam: Theatrum Orbis Terrarum, 1971.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy, What It Is, with All the Kinds, Causes, Symptomes, Prognostickes & Severall Cures of It*. Ed. with an Introduction by Holbrook Jackson. New York: Vintage Books, 1977.

Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy: now for the first time with translation and embodied in an All-English text*. Ed. and trans. by R. Jordan-Smith and F. Dell. London: Routledge, 1931.

#### 既訳

「第1部 第1章 第1節」	『京都府立大学学術報告 人文・社会』	第59号 2007 所収
「第1部 第1章 第2、3節」	『京都府立大学学術報告 人文・社会』	第60号 2008 所収
「第1部 第2章 第1節」	『京都府立大学学術報告 人文』	第61号 2009 所収
「第1部 第2章 第2節」	『京都府立大学学術報告 人文』	第62号 2010 所収
「第1部 第2章 第3節 第1-10項」	『京都府立大学学術報告 人文』	第63号 2011 所収
「第1部 第2章 第3節 第11-14項」	『京都府立大学学術報告 人文』	第64号 2012 所収
「第1部 第2章 第3節 第15項」	『京都府立大学学術報告 人文』	第65号 2013 所収

(2014年10月1日受理)

(おかむら まきこ 文学部 共同研究員)

(かわしま のぶひろ 龍谷大学 准教授)